

# バジル

## 弥生時代に伝来？花粉確認

### 奈良教育大など論文発表

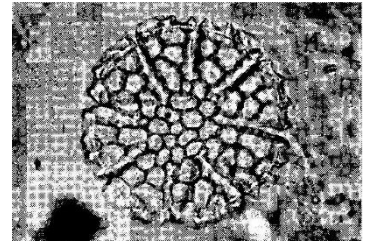
邪馬台国の有力候補地・奈良県桜井市の纏向（まきむく）遺跡で22日までに、日本で自生しないバジルの花粉が見つかり、分析した奈良教育大の金原正明教授（環境考古学）らが論文発表した。弥生時代に中国から持ち込まれたとみられ、金原教授は「遺跡が大陸との交流の拠点だった事を裏付ける発見」としている。

花粉は、1991年の発掘調査で、遺跡の中心にある3世紀中ごろの溝の土から検出された。植物の特定は進んでいなかったが、金原教授らが現生のバジル花粉と比較し、判明した。

バジルはインドや東南アジアなどが原産。イタリアで香辛料として使われた一種が世界に広がり、日本には江戸時代に伝来したとされる。見つかった花粉は、国内最古のバジルの存在を裏付けるという。花粉の形状などから、金原教授は東南アジア産の一種と推定。見つかったのは微量のため、遺跡周辺で栽培された可能性は低いという。

金原教授は「交流のあった中国の王朝から乾燥したバジルが持ち込まれ、薬などに使われたのではないかと指摘する。

論文は桜井市纏向学研究センターが発行した研究紀要「纏向学研究」に掲載された。



平成27年5月23日（土）／南日本新聞